

新型コロナウイルス 感染拡大の渦中で

コロナ2年目のクリスマス

高槻日吉台教会《高槻市》

今この時だからこそ開かれる扉



オンラインを通してでも伝わる蝋燭の光

安心できる場所を捜し、次々と宿屋の扉を叩くマリアとヨセフの姿を想いながら、今年度もコロナ禍に向き合い、宣教の扉を開き続けるクリスマスが過ぎました。感染症対策のためにいくつもの扉が閉ざされましたが、ため息を祈りに変え、「お言葉どおり、この身に成りますように」と、主が開かれる扉を捜し求める日々が続きます。

多くの教会でも行われたように、高槻日吉台教会でもオンラインを併用し、会堂に集う人数を制限して、クリスマススイヴの礼拝を守りました。寒い中、換気のために窓を開けていましたが、外から風が吹き込む度に、蝋燭の火が大きく揺れ動き、その光景は、オンラインを通して礼拝を守っている人々にも印象深く映ったようで、ある人は「主のご降誕を告げる聖霊の臨在を感じた」と感想を伝えてくださいました。

昨年度来閉ざされた扉の一つは、教会員の家や街をめぐり歩くキャロリングです。そこで私たちは示された新しい扉は、「回らないキャロリング」と名付けた、聖歌隊の賛美を収録した動画配信でした。マスクを着用し、間隔を広く空けて立つ聖歌隊がクリスマスキャロルを歌います。その賛美の歌声を収録し、クリスマスを象徴する映像と共に編集をして、クリスマスイヴの日に教会ユーチューブチャンネルにおいて公開しました。その

賛美がインターネットを通じて、これまで以上に広く世界中を歩き回ったことを思えば、これもまた主の驚くべき恵みだと感じられます。動画配信の良いところは、その場限りではなく、時も場所を超えて、何度でも繰り返し視聴できることです。やがて、コロナ禍の貴重な記録としても、この動画の意味は深められていくことでしょう。

一日も早くコロナ禍から解放されることを願いながら、今この時だからこそ備えられ、開かれる扉に目を注いでいたいと思います。光は暗闇の中でこそ輝いているのだということを、今こそ共に想い起こしましょう。

(吉岡恵生報)

学生キリスト教友愛会《杉並区》

コロナ禍にあつて、学生・青年センターとして

1931年創立の日本キリスト教団の学生・青年センター「学生キリスト教友愛会（SCF）」教会と同じく「集うこと、信頼と信仰の共同体を形成すること」を大切にしていた私たちは、2年前のコロナの出来事で「集うこと」が制約された活動も大きく変化しました。

青年たちは「コロナ禍だからこそ活動的にポジティブに」を掲げて、リモートであっても下を向くことなくプログラムを立案し、週に5回のリモートプログラムを通じて共同体的形成と仲間への励ましを送り続けてきました。また緊急事態宣言の解除後は、会館の換気設備を点検し空気環境の整備、定期的な消毒等、様々な対策を講じて「集うこと」を積極再開し、ハイキング等の屋外でのプログラムは人数の上限も設けませんでした。その様な取り組みの集大成として行われた昨年のクリスマス会は、複数回に分けて行い密を防ぎつつ、今までで最も多い約140人の青年たちが集い喜び合うことができました。コロナ禍にあつて

自分たちも苦しい中でもがんばってくれた青年たちの努力が認められ、心から嬉しく思いました。

青年たちは教会のこと、自分たちも苦しい中でもがんばってくれた青年たちの努力が認められ、心から嬉しく思いました。

青年たちは教会のこと、自分たちも苦しい中でもがんばってくれた青年たちの努力が認められ、心から嬉しく思いました。

合いました。そして今回はコロナ禍にあつて感じた恵みがあるはずだと、マタイ福音書14・22〜33の主題聖句から試練や迷いの中にあつても我々の手を離さない主の慈しみを分かち合いました。その様な中で、昨年のクリスマスにも仲間の内から教会で新たに2人の受洗者が与えられたことも恵みでした。

またこのコロナ禍では、西東京教区をはじめとする教会への「リモート礼拝実施に向けたサポート」を青年主体で行い、教会のお役に立つことができたのも喜びの一つです。

協本教会《男鹿市》

暗い夜に小さな灯りがともる



幼稚園での聖誕劇礼拝

現任陪餐員13名という地方の小規模教会です。幼稚園と共に、創立以来51

年を歩んできました。コロナ禍での2度のクリスマス。幼稚園生活の集大成であるクリスマス聖誕劇礼拝は、参観者を1家族1名と制限して行いました。

11月も半ばくらいになれば園内は聖誕劇一色です。イザヤやルカの御言葉や讃美歌が、自由あそびの時間にも園舎中に溢れています。

聖誕劇は30分ほどの一幕物です。教師が行うのはピアノ伴奏と照明のみ

で、年少から年長の園児たちが全員で賛美し、演じ、進行します。年少児の時は羊やラクダやお星さまで、年中児になったら天使たちや宿屋さん、そして憧れの年長児になったらマリヤやヨセフ、エリヤや博士たち、ナレーター、ソロで歌う「さやかに星はきらめき」子どもたちの成長と共に聖誕劇はあり、毎年大きな感動を与えてくれます。

秋田は人口減少（とりドルサーピスの最後に、2021年のキャン

(中西絵津子報)



2021 クリスマス会（第2部）

大学生をはじめとする青年は、特に真面目で誠実な青年こそがコロナ禍で一番制約を受けています。本来、受けられたはずの出会いや感動の体験が大きく制限されています。だからこそ教会の枝である学生・青年センターが彼らに癒しと喜びと感動と成長の出会いを多く提供し続けようと思案しています。オミクロン株の感染拡大もあります。今後も最大限の感染防止に努めつつ、最大限の活動を続けてゆければと願います。お祈りください。

(野田 沢報)

2021 年東北地方地震
被災教会会堂等再建支援委員会東北教区・関東教区
10 被災教会の声

(オンライン訪問)

名取教会に伺って

11月9日午後、宮城県

名取市にある名取教会の方々に、オンラインでお話を伺った。名取教会は、JR名取駅から徒歩12分ほどの所にあり、近くを通る国道の高架からも空港アクセス線の車窓からも屋根の上の十字架が見える教会である。この印象的な十字架が、今回の地震によって基底部が破損する被害を受けた。

写真下中央、牧師（右）と
教会員2名

名取教会からは、荒井偉作牧師と教会員の高橋嘉男兄、菊地誠兄が出席され、2021年東北地方地震被災教会会堂等再建支援委員会より、篠浦千史委員長、黒沼宏一委員、河田直子委員、オプザバーとして保科隆東北教区総会議長、道家紀一担当幹事、星山京子職員が参加した。

十字架が立つ尖塔に登ってみると、十字架の付け根である基底部から雨漏りが見つかり、応急処置をして雨に対応したという。教会員の菊地兄は、建設業に携わっておられ、大震災の時も、様々な工事の手配をしてこられた方である。今回も雨漏りのしている箇所を錆止めとなるような処置や、大量の雨が降っても溜まらずに流れ落ちるような補修を行い、礼拝堂の壁や天井の穴、剥がれの補修、大きな木製の玄関ドアの破損箇所修復など、写真を見せていただきながら、菊地兄より説明を受けた。3ヶ月ほどかけて10月25日に、これらの被害箇所の修復工事を全て完了できた。資金は前年に加入したばかりの教団会堂共済組合からの見舞金、教団からの支援金と、教会の積立金で賄うことができた。多くの支援があったことに感謝されていた。教会員の中で唯一被災した菊地兄宅は、福島県内でも一番被害の大きかった新地町にあり、宅地内の地面が割れて住めなくなっている状況で、菊地兄には教区から見舞金が支給されたとのことだ。今後、また大きな地震に見舞われるやもしれず、温暖化の影響で台風の被害も予想され、いつどこであっても災害に遭う可能性がある。そんなときに教団内に常時設置されたグループがあれば、人的手配や

支援が迅速にできるのではないか、と荒井牧師は提案された。

現在の教会の様子を伺うと、地震やコロナ禍による影響はそれほど無いが、礼拝出席者数が6割ほどに減少しているのが、なかなか戻れないという。しかし、昨年、今年と2名の求道者が与えられ、大正期のリードオルガンを修復して記念コンサートを行ったところ、45名もの来会者が与えられた。クリスマスイブにも、地域に開かれたコンサートを開きたいと展望を語られた。コロナ禍による対面の礼拝ができないという困難もある中で、映像をうまく編集して子ども向けのページェントを行うなど、これまでになく方法による伝道へのビジョンも開かれている。対面の礼拝が何より一番だとしつつも、今後の伝道への新たな一歩を踏み出している名取教会のお話を伺うことができた。感謝のうちにヒアリングを終えた。

(河田直子報)

東北地方地震被災教会支援募金

郵便振替口座

◎口座名 日本基督教団

◎口座番号 00140-9-145275

通信欄に「東北地方地震被災教会支援」とご記入ください。

正義と平和のための台湾エキュメニカルフォーラム

国際社会における台湾の
孤立化を受けて

2021年12月7、8

日、台湾キリスト長老教会主催による「正義と平和のための台湾エキュメニカルフォーラム」がズームで開催され、パネラーとして参加した。

参加は各国から約80名。主題は「新しい冷戦の時代：地政学的観点によるアジアにおけるグローバルな帝国の復活」。背景には国際社会における台湾の孤立化がある。そこに加えて近年では中国の台湾への軍事的侵攻の緊張感が高まっている。台湾の識者は2028年までに中国は台湾に軍事的侵攻を開始すると予測している。もしそうならば単に台湾・中国の二国間の問題ではなく、アメリカ、日本、韓国、更にはロシアを巻き込む地球規模の争いに発展する可能性があることは容易に想定できる。

7日は台湾プロスペクトファウンデーション代表のLai-I-Chung博士による主題講演が行われた。

8日はニューヨーク、ド、香港、韓国、日本、フィリピンからパネラーが立てられ、それぞれの地域における中国との関係を紹介しつつ教会的な解決を模索した。特に香港のChung Chi-Yan大学のKung Lap-Yan教授の発題は、ここ数年の香港の実情を反映し生命の危機を覚えながらのもので緊張感に溢れていた。

日本側のパネラーとして主に2点に絞って発題した。第一に何故台湾を中国の一部ではなく独立した国と考えるのかである。国際政治大学の台湾人の意識調査によれば、台湾人の意識が中国人ではなく台湾人であることが紹介された。東京オリンピックにおけるアナウンサーの「台湾」チーム紹介にも触れ、日本人の意識にも言及した。第二はどのような手段で紛争の解決にあたるかである。「教会」として武力による解決は断固反対であることを中国、アメリカ、台湾、日本に発信することを主張した。

(加藤 誠報)



辻田 岳さん

喜ぶ人、泣く人と共に

1971年埼玉県所沢市生まれ。
高井戸教会員

辻田岳さんは、幼い頃、キリスト教保育の幼稚園に通い、クリスマスに母親が通う無教会の集会に参加した。馬小屋という世界の隅っこで生まれたようになったイエスさまに不思議な親近感を覚えた。

高校時代、ある先生との出会いの中で、聖書の学びの楽しさを知った。だが、教会は窮屈な所だと感じ、神さまは信じて洗礼は受けないと思った。先生から「そういう人生もあるかもしれないが、中途半端で寂しいことだね」と言われたのを覚えている。

社会人になって数年後、通勤電車の中から、教会の看板に礼拝の説教題が掲げられているのを目にした。ふと自分

が神さまから遠く離れてしまったことを感じ、教会に行きたいと思った。やがて高井戸教会に導かれ、受洗した。

今は、日本赤十字社で国際援助の仕事をしている。辻田さんは言う。「以前、『世界の中心で、愛をさけぶ』という映画がありましたが、自分はいつも世界の片隅に惹かれるんですよね。」

貧困に直面するアフリカの国々、大地震に見舞われたハイチ、紛争の続くウクライナ等を訪問。圧倒的な苦しみや悲しみの前に、人間に出来ることは限られているが、祈りを伝えることは出来る。東日

本大震災の時、世界中から膨大な数の励ましのメールが日赤に届いた。アフリカの貧しい子どもからも募金が送られてきた。人を助ける仕事も、多くの人の祈りと助けの中にあることを痛感した。

コロナ禍にあって、高井戸教会の長老として、CS教師として教会の歩みを支える。教会は、子どもから高齢者まで、様々な背景を持つ多様な人たちが主の面前に集う場所。だから祈り合い、支え合うことの大切さを感じる。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」。そのみことばに日々勇気を頂きながら。

年末年始の休みに石垣島を訪

れ、教団で最も新しい伝道所である石垣農村伝道所の新年礼拝に参加しました。川崎正志牧師夫妻が、2019年10月29日に、地域の人々の憩いの場となり、「世界の平和は子どもから」の祈りに沿って「子どもの教会」を形成し、キリストの真実による礼拝の場となることを目指して、サトウキビ畑に囲まれた土地に立ち上げた伝道所です。

川崎牧師は、最近、石垣島で自衛隊基地の建設計画が進められているのことで、基地不要

石垣農村伝道所

状況を各所から見ました。川崎牧師も住民の不安を共有し、その交わりに加わっています。

石垣港には海上保安庁の巡視船が十数隻も停泊し、尖閣諸島をめぐる中国と渡り合う基地

となっています。日本の防衛戦略の先端にいるきなくさい現実を目の当たりにしました。

伝道所の設立直後に新型コロナウイルスが蔓延し、活動は制約されており、新年礼拝の参加者も牧師夫妻を含めて5名。しかし、石垣島の人々に福音を証しし癒しと憩いの場を提供するだけでなく、100年先を見通し、日本全土の子どもたちを「石垣農村自然塾」に集め、世界平和の礎となることを知らされ、励まされました。

(教団総幹事 秋山 徹)